【コラム】川越の自然をたずねて（59）キノコ（その 1）

2010.7.4　第 3 回「キノコの観察会」

自然環境部会において、2015 年から 3 年間にわたって取り組んできた「キノコの冊子」づくりが大詰めを迎え、編集作業が続いています。自然環境部会が発足した 2001 年当時は、「川越に野生のキノコはあるの？」のような認識でしたが、四季折々、「（仮称）川越市森林公園」計画地の自然観察を続けていると、キノコは常に身近にありました。

かわごえ環境ネット会員でキノコに詳しい稗島氏、大久保氏を講師に、第 1 回の「キノコの観察会」を 2008 年 9 月 21 日に開催しました。そのときは 20 名の参加者で 37 種と観察記録があります。その後会を重ね、今年は 10 回目になりました。その間、写真や記録が蓄積し、これらをきちんとした形で残したいという要望が会員内にあり、冊子を作ることになりました。写真を自前で調達する必要から、この 3 年間様々な場所に足を運び、生態的な役割についても学習を重ねてきました。

「（仮称）川越市森林公園」計画地でよく見つかるのはテングタケ科、イグチ科、ベニタケ科などで個体数も多い方です。これらの多くは菌根菌と呼ばれ、土壌の中に菌糸をめぐらし、周りの樹木の根の周りを覆い、栄養のやりとりをしています。菌糸からは水分や無機栄養分、樹木からは光合成由来の有機物をもらって、共生関係にあります。すなわち、これらのキノコがあるということは、健全な生態系が成り立っているということになります。また、林床を飾るキンラン、ギンランなどのラン科の植物も菌根菌と共生しています。この雑木林がなくなれば、キノコもラン科の植物も失われることになります。

川越市で他にキノコのよく見つかるところは、池辺公園、川越水上公園河畔林エリア、川越運動公園周囲樹林帯、市民の森などです。以下写真は冊子編集例です。体裁は A5 オールカラー100 ページで、2018 年 2 月 25 日の第 16 回かわごえ環境フォーラムにて刊行予定です。

（自然環境部会　賀登環）

ヤマドリタケモドキ　　イグチ科

イグチ科のキノコは大部分が梅雨～初秋に発生する。地上生。傘、柄を持ち、傘の裏面が管孔で菌根菌という特徴をもつ。

テングタケ　テングタケ科

夏～秋にシイ、コナラなど種々の樹下に発生する。傘は褐色で白色のつぼの破片のいぼいぼが多数散在するが、いぼは雨で脱落することも多い。柄の基部にはつぼのなごりが襟状の輪となって残る。キノコワールドの主役のような愛嬌のある姿。菌根菌（天狗茸）

初めは真っ白なかたまり。トゲトゲが全体にある。

傘の茶色が見えてきた。

2014/09/05

似たキノコ

テングタケダマシ

■科

傘のいぼや柄の基部にあるつぼの破片が角錐状に尖っている点で異なり区別できる。

冊子の編集例